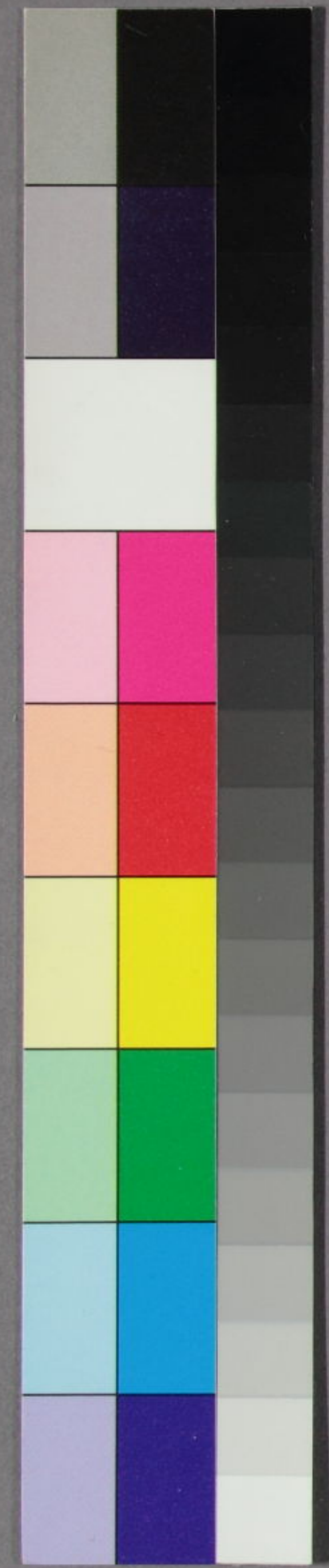


十燕  
種石  
當世武野俗談

三輯  
拾

4管1  
679  
30



679  
30

燕石十種第三輯十之卷

當世武野 俗談



八方有徳の君と謡四海忠民無為の化を樂と居る  
を和すとす 沖代の沖とありし州 天和和正  
事とまゝの義徳の事ハ燈のともとす 武野野の廣く  
その語を記せしハ沖書所預り木村先生の武野燭  
燭我ハ今日頃日おの 男面白き女親おめとす沖  
く武野燭と号し

寶曆七丁丑孟陬日

武江記録者

馬文耕

目次

- 大日屋治之衛
- 鞘町東伊
- 深川養子未蝶
- 根津烏お石
- 菱屋おりの
- 竹の子おあ
- 心彦鳥羽三徳
- 快全園基
- 篠崎三哲
- 要傳寺
- 大只兵衛
- 冬瓜仁右衛門
- 押上雲寺順善和尚
- 松葉屋瀬川
- 南樓京屋都
- 道源おと
- 新場九郎多清
- 池の九霞
- ケホウ
- 中將基
- 平澤たの
- 今弘法新高野心
- 河七屋華
- 風鈴五郎七
- 勝間龍水
- 大巴屋の娘こら
- 音羽町おきけ
- 素名女房情多言
- 鐘撞娘おつ首
- 藤植胡弓名人
- 淨林金瀬前藤常焼
- 七國將基
- 淡草橋場総泉寺御駕
- 御蔵茶伯お
- 小聖人左助
- 夜襲一と勢

○ 觀音境内お陸  
○ 車 波女

○ ちのち嫁お松  
○ 勇為薩摩琉球姫

○ 踊子 おゆり  
○ 不角十翁妻妙閑

三箇條目脱落宜書於其條

○ 大口屋治兵衛

其保能頃より室曆の今日まで世間其多きと云ふ事と云ふは浅草  
御産前と曉雨といふものあり九波せすもの世人を知りてはあはれ  
名大の屋治兵衛と云ふれ是仲たる米倉たるも其を賢大夫と云ふて  
弱を引きては法不違きをぬせを禮義を不礼

公庭を敬ひ不義の事少し御うりす是を補う男建と云ふて  
若し頃より新吉原へ入廻程甚息能く元文の頃吉原五丁町を其  
の愚者あり釋多町より来る釋多の条はと云者力量さく人の釋多  
大勢を運毎夜く吉原へどりきあるれを衣類の勇をそめて或時の  
黒羽二重の小袖羽織金指の一腰はつとみ女席を以て亭をも知ぬ  
ゆかりと客ふすも不もありと云世者金を多くせしむるは善婦  
之谷砂利場岡の地よりをゆめ竹くまへ共も条はを親しくとほ  
る中の中をたわふ成てりさきもとの愚は一毎吉原の女席は毒口を



まじや又楽はとき者百千あれびとて果つるを延すて皆終はま  
しき事とて更ふ合点せざりて既し真夜も鑑しとけし教と付は曉雨  
まほらんこく女中局を出んとすし付人々押当る各集八若も待居は  
夜唯とゆり終くと云曉雨着てされびとて各集八待伏せすらんまを思  
夜唯とゆりしと人よいつまん事を思ふたは夜深の夜も當る事  
なうれまの男をまらると云物とて終ふ夜深の唯ま人送らんといとも  
ま程ふ押當り唯ま人あつともまらうす長袖の小袖ゆりんの改中ゆ  
こはまをうて大門を出て夜深をとりとるを常よりあづふ通り大  
聲もさつめあすをうしひ房もさつめあひもさつて堤のまは  
頃も禰多も多しう原もさつしと久集八も待伏せしとぞ居るるを  
是を見て曉雨獨る大聲しとてあつと思議や世はるるしあつら  
わ白ひづすす千代小塚系の人焼白ひてもあつしとて思はまら  
禰多の白ひありね久集八も待伏せしと世もさつて待伏せし

あつとあつとすりやさしき事なれといふあつとあつと新しやんと  
さつと結懐のいそあつと尻もさつとすし色もあつと禰多ども  
多く待伏すしとくとも世もさつと思得しとてま人もあつとあつと  
却てかくあつと強くて居る社地もさつとて曉雨もさつとあつと  
き事どもあつと世事を人々聞修へぬは曉雨の英雄あつと世間も  
を流布しと人々賞讃せり是あつと事さつとあつともあつとあつと  
振ひし事多うりき平夜曉雨もさつとあつと久集八の男伊を扱も尻  
のさつとけもあつとあつと赤もさつとあつとあつとあつとあつとあつと  
き内へ縦金と姉川があつと廣信助も弟が男伊をも尻もさつとあつと  
下るは相違がものむり荒五郎茂多信雁金文七などあつとあつと尻  
のさつとあつと縁りとあつと形もさつと思ふ者もあつとあつとあつと  
今の三升があつとあつとはあつとあつとあつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

多の久米へあり銭がはうちの拍発三布いすけ今年亦不除く也當春  
曉霜と名を以て曉雨と云ふ名を任勢屋宗三郎はせち屋の事と云れ茲に纏る也  
宗三郎男をまろゆりたも者ゆくもかく未微弱之石松と云て其  
しき若流あり宗三郎を曉雨と云て思ふ神々大馬天を故不付たも

○ 押上大雲寺順善和尚

本所押上村大雲寺順善和尚とて活僧あり彼寺へ瀬川菊々郎を  
茲市に圓學院即善源阿是空居士善考實延己九月三日と墓ふも任持  
大を教ひ大旦那の如く好善香花して諸大夫の庭不ると大切なるを  
おしりも甚名塔の角石あり己九月も毎日知る人も知る人も門石を  
通るも後男女社寺へ入り来り路考の墓所の石塔を極巨一洞を流して  
有し世も色香をかたりて世の中をたびう一秋序の名人なり一が今も  
野介のこけむしを成て哀を思ふぬ人なり一仍角石をりし石塔も  
くも是て終ふ丸石と成たりとど思ふ和尚の心屋大々派山師と云を知

也あり

○ 勝間龍水

新和泉町の家を役を〜と習指南を〜と筆名を勝間龍水とて  
御府月小名を〜と者あり市川三作も渠が御所之御龍水今も存生たりと  
大よらり者あり金銀をむすほむ更にあく極く貧窮之和泉町の  
大長屋とて裏表をけて店敷百軒あり其曾孫の掃除を首目西  
砂村の百姓兼右衛門と云者毎年〜と代りて金ありて金も〜と云はれ  
大屋の代よりゆ〜と由相續〜と云金子をわすゆ〜と龍水の財を  
龍水〜と云らばどの代金をも〜と云とせんや金ふふ及〜と曾て  
是を〜とす砂村の兼右衛門の金を〜とす掃除をさせ〜と云らる  
き〜と〜とを替り者〜と習指南を〜と子孫除多有〜と階下の紙屑  
〜と紙屑買を〜と其母妻是を賣らんとす色いたる志うを屑として  
捨〜とを錢〜とてま〜とけの賣一ツもも潤く〜と身〜と〜と紙

屑をすきとるのこそよりいふ事不々まゝの紙屑をそ終  
けの美しう喰ふてあどいして買入る孩をあつすをり身と不  
宜あくまで不潔なりとて清貧な事甚だしく或時母女房寺詣り  
よの留守ありお正月の頃とて初糶賣末糶を唱調へ喰んと虫腹を  
すき貫文ふ調へては後を文もなり一日願母親信の者として持佛堂を  
清うかふわづり三具は光のてつやをたつて道具を不潔持せし難波所の  
仕立ものや賣り糶を調へて近所の遊路の家通平少遊十買りあつてを  
招き大よ年ういひして樂りり母親あつた驚きなげくこいとも  
多しわとも思はずして幾い争ひす居り希有の男あり當室曆  
六年杉の森稻之何の職をたつれとも不書仍る於水俣の頼りれの  
書を法録して付る事とちよと釣鐘の子ふも鐘又も鐘の子を風録と  
そとされん龍のよと地あり龍水の俣ありの地水と書くとして杉の

森稻之何の今年の筆名の地水と書ううとてわくはるは少少  
御城下の語りと草とちよりり

○新町東伊

新町ふ住居する東國屋伊は信是又世ふ知ぬものあり安針河水鳥  
屋也一あり今と其身居居して世とを樂らつて終日暮居新吾屋也  
入也より秋の川河瀬戸物何色秋儀移くうさず出で樂とるを同  
屋の息源はとる者是を勤公儀御産まう御用をも勤るを世東伊ハ  
世と廣く今世とどのく通りもの暮居者藝者の類ふ世人を敬む  
ぬとあし若き時の甚量自慢してあつてをりさして喧嘩は編一更  
鬼のやう怒る者どもも一夜もあつてをりあつてをりあつてをりあ  
まは候へ世とるを東よりとて二三斗張を東張といふ世者水鳥とち  
多儀の事と甘宰舎せし事と然とも写もたうと世年いへ但宰舎  
の内安針所の塵をさす御産此御用お勤りり願御側元の由也



滋谷和泉も度々と人其意を意へ

但世々細い滋谷氏妻をりい女房とす男子入滋谷の義  
況今東国に世男のてむ御おて葉の島とす申を世の

世東仔先年

大御所極御代東國御用之日光心の心奥へ入り推まされ入りて御小  
魔所之天物の怪居之必入路の事無用ありと所の者ともいふととも更ふ  
東伊合をせず件の心奥へ入りつゝ系百姓たる思を魔所之極居へ入り  
路へとつとも入らず東伊をこそ取件の心奥へ入りて夜を明す人々の皆極居  
入り東國を人々を病を明しつゝ世々御居候とてつゝと各々  
天物の為ふりさうきたつんとさうゆき件の奥へ入りて大連をて入て見れ  
東伊と大なる岩角の枕へ能寐をく居り皆怪異の思ひをあらして  
東伊が大変を感へ暗夜何ぞあやき事いさつゝとすや東伊受  
てよく病入て平なり知すつゝつれいんく舌をふくひて勇氣を  
感へつゝつ後日光由普精始松平を執大捕度由他のも由用也精  
取東國を治一日光へ系つれい東伊居つゝ先年魔所へ入りて夜中

そ所ふ唯ま人居つゝ奇妙う人々世人は天物の由であひ守を  
世々つんとて當地のものとも守を願ひつれが東伊を天物の守りとして  
小菊の鼻紙をふさぐ切ぐ平形の裏判を押してつゝつを百姓に大き  
悦ひあつゝ張りつゝ東伊が天物除の守れ今日光をよまつゝつを  
かうつれ極居をさうして御居候とて知れぬりのふり當り月新枝  
本所より出た一塚所道居候所を居候とも焼失の故も述はせ居候  
を奥出り市川極居御川仙奥を人をも前の宅へ連れ入り先御居候極居  
三津の多人を火を焼失され極居候へあつゝつとて人々極居大御自慢  
つゝつ宣ふ活きよの者へ平夜儀程の序ふありつゝ東伊も毎夜来  
りつゝ威付東伊が肥前嶋原切支丹一揆を西海道の諸侯不残に遊遊  
御名代あつて極居の骨を折るつゝ今付かあのかう御事あつた町人の  
活命あつて折れあつた極居あつてお併世東伊極居あつた女れをて入つてつ  
座の者ども一笑せり天晴をさし今世の仁志と唱へつゝ善量有あつ

○新吉原松葉屋瀨川

新吉原江戸町松葉屋半右衛門抱瀨川といふ傾城は十ヶ年以來の  
五丁所と並ぶるありき金儲けこそ人とあり異は支那女といふも  
往昔を尋ふれば世里にも寛文の頃より小紫の流和歌の道なきし  
ふり安島の道を尋ね風雅といふやこゝ世にこそつく偏ふ  
石の寺の観世音といふ源氏六千帖編集といふ系或はとも似たりそ  
そ名を小紫と号しといふ名なき雅女といふ江戸の小紫が花記院文章  
その神くけりの艶ある文章ありと英徳支考の和漢文標よのせ  
れいふあゝいさず又島原に吉原の初め浮船と名ありを或春郭橋  
の花盛を見て鴻魚籠中の吟こそ

あゝめさくはをふ吉原を花ざりし

と云名向ともいふ是も世よ吉原と唱まらるまらこ徳のひともや  
江戸町若荷屋の奥別が提灯の文字貞信英婦胎と云文字

の裏は假名よしてまらんいのらあ〜とさ〜中の所く持せ道中せ  
と〜と後享保は順美字を九室の浮世の末は隅田川の二十一字よまの  
大岡忠相の権をわ〜と要秘録は先をある〜わ〜きり  
豊永皆〜郭は花紅葉とを時〜の〜と〜今と皆教果〜  
又本春も咲花の絶ず〜今松葉屋の濃川と云雲量其徳〜此里  
随一の英人王照君西條も面を征通山所も顔を尋〜次女〜其生  
を中総國小貝川のうらぎ民の娘〜り初〜と松葉屋半右衛門  
抱て教らる自然と女は道〜事をも〜は〜是を女妓の産  
下通り三味線と福屋と勿論〜糸の湯雛結其雛又去〜とあ〜向  
る風も思後よ召ひて鞠あともと〜あり鞞笛乱舞も能〜能  
書して信をよとあ〜れ廣澤鳥石の流義文微明〜玉蹄の眼を  
ら〜唐詩選を取ら〜歴〜の儒者れ〜りも爪をら〜とせ繪も  
よ〜と〜京の〜年〜と〜と〜画〜と〜と〜  
流階の乾汁

未仲が引付ふ入てあつて人の知る所を易道よ妻に心を用ひ平海左内ヶ守と申してト莖を学ひて平生かのまが座あつた者を紫の服紗ふ包着由を討給の小箱よ入て置侍由女席の願ひ事感と待人宮れ往來首尾の苦憂毎のく是を占て樂とすこゝろの女子の去来宝曆五の春江を所或丁目丁子を抱雛鶴と云るをまは女田所心寄斗仙根引て郭を出名残の中の間して近附ふちう一由瀬川のうさう雛鶴く版別を送りて文例の通廣浮流して唐紙の信丈摺の半切み

き都く山根川の急のうき山新祝山浦の妻事ハこのうの跡ふ及と云をり白雲一陰陽を新湯を養うく山一生中貯てその卦為人瓜長吉月あ人かうつくこと頼母あめてつれ中とちよのと

うさちのわのー穴貫

てう雛さう

瀬

世み去年の夏の山人のつせに依て是を言て今世草格を写く是を伝て人さふのうはあふあらす世瀬川右も通あるに客を雇あよせす家内の侍輩女席をうくいまめ金銀衣服麻道真新造也一彦安弁由御不義の心あさやふいまく心をうひらんと世系よりうあ古流豊後ふという上さ世よをやり此室裡の事あり一此瀬川急なはいま一りて家内の女席よ此くろりを語らせす子ども禿若者也松葉屋の豊後ふをうあつ一人もあーむいんき文版あまばかりまとも三味の場合あればうをうさすといふ事いふらんとも新造をういんあーん東ままの艶あつ文句のうさうををむいんせう空のうとあーとす松人

柄ありき客を松葉屋の二階へいささかの事叶りだされぬ傾城控女を  
此家より隠し之葉お祿又いふてう之葉あどくそも昔の客の少  
知る事をお命どりのさうさきわくさ何といふ事やうさうさ  
やうなす事い傾城控へ諸藝法商人とも之葉つひい府帳さ  
卯の人数を知りし先傾城よりわくさ松葉屋の御りやきさう  
の言葉を書きつすし此瀬川が作ると松葉屋のふさう之葉を源氏六  
十帖といふ風雅のものへ今も宿中へお習を通らる其の二三のさなぬ  
あさす

さうさびと  
うづま火と  
蓬生と  
夕顔と  
雲うきと

思ふと云ふてあやういふ  
をぬ君の思といふ  
やうて云事ゆれ大をきか  
うりうりの思といふ  
きんたの事  
うらみらる客の事ほゆ  
んゆら客の夕顔といふ  
きんたの事

うら夜と  
若生と

きのやの事  
後の事

景の事数しうれもるもいまさう多く思ふす誠なれし事とも  
お瀬川がさうゆを多し記すてせ揚を所多ねをさ中の所とい  
そう瀬川もさうさ常盤屋文字をまといとさうり得り瀬川はさ  
幸順を一通しうあをいへ夜ゆさうと顔ひゆ私に再持さ  
頼中も入ぬ話のほどさうささきささゆりなれ瀬川さうい  
執心といひも除後もさうささきささゆりなれ瀬川さうい  
祝さうささきささゆりなれ瀬川さうい  
いさうささきささゆりなれ瀬川さうい  
文字をまも満しして綺羅をさうりさる船宿たいこはさうり  
客と物りゆりなれ瀬川もめて座よつさあさうしてそ後瀬川文字  
をまよさうりをさうり日頃豊後づを嫌ひ瀬川ゆもゆす

思ふ人々も有りりる文字をまを娘へ聲をのりけ瀬川が乱よつん  
と思ひ精をわけて語らぬ瀬川先より月目録金子千尺其の此せり  
文字をまを娘の世に今月の内を候よりある天啓面白く思ふ人の  
禮謝もその酒もその酒もその酒もその酒もその酒もその酒も  
おもしろく文字をまを娘者として瀬川よも人々をく不届本事を  
並々の位ある傾城と思ひつるものなり其の心をあつての郭の女節も  
と福理治あつて位をうけてわあ成る者ももの教りもそのついで  
瀬川がみるは通れ成事としてあをその郭の家となりて去年宝曆  
丑の年の暮の市を家助治めて郭を根付と実を去大寺の山家老根付  
あれも表向の市を去去年十二月の市を女房やで来て郭を  
連立して美研堀村松町浮きまき信山を裏に借り坐敷としてついで  
ありりる

○大八やの娘とつくと仇名を

世貞次の浮川巻子の段と前後

甚願す三味線御とういふとつとも坐敷の女とて五郎の所仲  
他の女も異あつては不届美客あて幸ひて更ふすの位ありてお蝶  
を人々お蝶と名ありされぬ也百花鳥續百花鳥の如くは郭の女  
これ百花鳥も洲崎の米蝶と人々をさうせんあり米蝶と名は  
米のお蝶と名ありてお蝶と名ありてお蝶と名ありてお蝶と名あり  
やり先して深川伊勢崎所と名ありてお蝶と名ありてお蝶と名あり  
数馬をまを娘と成りて女をまを娘と名ありてお蝶と名ありてお蝶  
三味線と名ありてお蝶と名ありてお蝶と名ありてお蝶と名ありて  
廣山路と名ありてお蝶と名ありてお蝶と名ありてお蝶と名ありて  
て見舞いのついでお蝶と名ありてお蝶と名ありてお蝶と名ありて  
佐田の秋とついでお蝶と名ありてお蝶と名ありてお蝶と名ありて  
ついでお蝶と名ありてお蝶と名ありてお蝶と名ありてお蝶と名あり  
身を賣つて自ら自然と名ありてお蝶と名ありてお蝶と名ありて

のかとうとをまといひんず未蝶ととほまて今三國世地りて  
並ふ者あり仍る親并姉尊東之助源川伊勢守所日て今を  
相恋ふ凌き深川けかとうととささるる一うらり一を親えいせ備所  
一来て深川して居たり世は深川深心守りて身延の宮暖のまお標  
が如親も水鉾を賣らるゝおとうおは深川やうゆ一親をへるり  
居らんがその水不へ夜く出居たりうらり群集のそ旅吐るまは  
らひゆらん事い志き英果よ見とまて居たりされいそまきうれ  
とく候一うま良氏より育とやうあて子供の時より綾羅綿繡  
のよふ深川の茶屋をて育一をそ志き活氣をて候初ももも  
一き事あり金銀衣服をさうり大切と思ひす誠は天氣をて松の位  
とも云つて一或時此未蝶并赤天おらん本郷をおさるたをといふ名題者  
三人連きて八幡所を拜一あゆむけし時仲所小を居の初よて三人  
養子きぐすこ小をを見て居たり往來の人とも大勢立ちまり是を

つま一草は復、傍心とと極めて腹ありき人也大なる復家の前よ  
るまを人ゆて復、傍心ととまを水をきくせうれい又切とい傍心とと腹  
ふちまき堀くせうれい堀池傍心と仇名取一は是非もあ一是非も  
あ一よふ新告京大をといふ娘一人年順ふ成てむ相恋本生を  
背あり然らふ世五年以前京所大文字を市を取とてそ能見昔後  
改の形うぼちやとゆらうとてよふ京所大文字やめうぼちやといふ  
と廓中をとりき地より思ひそ一廓中の時花とある未言終よ  
是をゆて咽ひ候とといふ中のゆふうととまゆらうととあつとあ  
らんまといふ大文字を此名題して一志を結ぶ解果留一うらり幸  
の事におもつ大をの嫁あつといふ今一悦候娘ともなう一光  
以義も旅人柄あまて残るなうり一と地より若者き人巴をの嫁よ  
をを通一西章をを以口候れとも地より風情の者あとい返事一も  
ふ及赤控道らうを世者憤り若者とも云合れととて高の意報

をさうしんとなつて夜ふたつと大己の首よりあり大己の首のどろ娘  
と何個ひあつたるも一丈虚を喰ふと万丈實を喰ふ是れ大文字や  
のさういふ個いふ世も人も流布して大己の娘仇名とあり一事  
甚運悪の事いふも一丈一丈の祥の事大己やあつたや此の事  
初うとや思ひらん淵川も身を沈めんと思ひしが父母のうらみをか  
てそ事もあつた月日を重く一丈一丈を助けて夜ふ  
自信を知る人さう今さういふ事可なり自ら介する婚嫁してま  
うさうさ

○深川花子米蝶

深川の唯出花子の住む北川ふらふらと心猫といふも此の所あり人  
性て是を唯を別ある事ふらふらと云ふ事あるす北國の如く  
たう川の流もあり志は遠國地獄の人帰帆する付船をわ  
て送る花里通高考と云書あつた事あり申すおとすと云妓女

見ると時よも花の真さうも英一と云花の入りと云をわいふ事  
一は後より入一此の義さうさうけあつても根の若あつたやん事あり  
中より顔りの義の中のもの軽解後の確りどりあつた人  
三十あるとか自慢目で見せると人いふ事あり居ると付米蝶は  
つとをいふ事見事いふ事ありこれの事あり此の  
さうさ義の中より廣世をいふ事あり一此の事ありさうさ  
英あまをすいさうさ中の中さうさいさうささうさ一價を  
三十ある塵芥のどろ小の命いふ事あり一此の事あり  
米蝶が拂下るといふ事ありさうさ大空に飛せられ雲井  
さうさ小花さうさうさ初め見物して居るといふ事あり  
大氣ふ肝を消さうさ終ふ事代金米蝶が拂けさうさ織  
希有の者といふは此の世さうさ廣うらうさ

○南樓京都都

南樓ハ品川端此處海道よりしてをを暖ふ夏ハ涼秋東の方  
皇洋敷百里総房の二別不対す西よハ殿心なり純景の地  
ありらると水乃芝は苗中濱といふと難不も陸をひらき純ハ心  
經てもる品川の人も北別は類して多しハ結ハ髪よりして眉毛  
息らんあり人と交る事ありて馴居る中一とまりを倍り咽う  
うらとらとも若てニ味徳よ合す常ハ海よたのちて旅客の指  
を西よりなりまふ當不京屋の抱れ女よ都といハるを中より斗  
あく生色付顔よく色色といふ家名よ是て都と名高を以て急  
量を思ひ斗一とされハ品川の遊人惟々此都を知りて人あらんや  
然る不都産愛の新酒事何うも甘く一とらしてゆけのきととい  
とも床よ今くそ軒をうく事夥し何色の客よとととも軒  
をうわてさうぐき事い斗あり是れ以の介のありき癖あり  
と云然一とされハ都を軒の女席とて名題之然る不品川を史ハ東

そ中むのや一と末の松心波ささぐと誰志うぬ者もあくとつと浮  
名も立国の紅葉ありとも秋風を吹ぬ中成るまよ迎ふ此は  
百馬麻と云書よ

河東の火きく福あく軒馬麻

とい馬麻のそつと此系屋の都々事とうや此都筋のうちよ坊を客  
をきこひて一人もささず医師のこもを通りあり人々を客を初  
らして客を嫌ふハ何といふともさう力あるとてささす能を心を  
吹ハ昔より南樓といふ縁ハ長榮といふの西化多くとまて金銀を費  
そ身終ふ還俗のつこと成者多しそ佛の種をきつといふの之更で  
ぶた女よ土障の黒源一浮川中のみたりすしあき地獄の使とも下  
世爰とて終ふ坊もふ不道といふ下風とてむハ剛強を拵一人といひ  
下

品川を産 蛤 枚子 魚類



○音羽町石見屋お志げ

音羽町といふ所を中の人倫あり近幸敏常景す北に護國寺といふ如  
藍と雅司ヶ谷といふ名あり西南に目白といふ景地あり又川水と氷を  
猪の尻とを流るとして東にあり此所の人倫大に川に因りての静と  
初なる人よりゆるむ時よきせしを有る遠より坐す國法と見たり此音  
羽町の茶屋は石見屋と云ふとて女房お志げと云ふ元來の節せし如  
急量もより平たお静りて多しお志すやうかおあき生れおを  
此所は石見屋の家とす地より見つけと遠く大か持之史を知りてのあり  
む力を終り人ふとせし事あり此頃その大かを知り事あり音羽町の  
うち角力取年音羽の峯右衛門といふ者あり渠より力ふ若者の相撲  
取大勢未して居たりしが或時角力取ども三人連を近不を白くをそ  
のきとりたりは七丁目蓮光寺といふ日蓮宗の寺とて若巻陀羅  
尼修りて多偏の男女衆しそはく件の角力取ども多て若き女あごん

つさうのり人此形をて我ら樂とするたはけとの世ふまきり  
は彼お志げも多偏りたりふ女ひとり借つれく蓮光寺の空殿椽  
側通り小居るれい角力取人未て彼女房の尻をたてたり知ぬり  
して居るるを程お志げをいりてを頼るお志げを  
とり膝れりお志げふ力をわしてあごんは大人お志げの如く  
若石を以てお志げようけりとも是れいりて増えき大の角力  
取を腕をひりけり半骨はらひけてお志げを思ひんるる  
は彼男もあまふあり頼る冷汗を流し泪らみお志げをいす頼を  
あごりて若しお志げの顔も怒りずふとてお志げより水晶の長房  
の珠粒を有る三宅祖師を拜し自我偈題目を唱てお志げを  
居りたりを側り顔目講中の麻下りお志げを束とてお志げ  
徒らりお志げをゆるり角力取を元き人命を叩りお志げ  
是より音羽町のお志げとてお志げの知りたり

音羽町のちま巻

風車

蕎麦

焼餅

○根津の鳥於岩

根津と云ふを地卑うして南の方を空けく羨あり西を敵と  
と根津多うしてまゝに根津野のやうに地之林属ふ蓮池と云ふ  
池といふ所なり二三所中は鳥あり天女を結す夏の頃蓮葉の  
こも蓮葉の如く又根津の社に門前ふ茶屋を各に水を搦ふ夏  
人柄音羽の類す人家をてらうと云ふ小唄のうす此根津の社女  
川島屋のお岩と云ふ鳥をてらうと云ふ此女撲ねすて  
の道具の鳥をてらう寝枕の鳥を結ぐて夏をの衣  
裳と云ふ道具も皆鳥をてらうて鳥を結ぐて謂をてらう此  
女は親身うてらう者もてらう此いともみもつてて披あはれ  
親の為ふ此根津へ身を賣つててらうされども親を恨む心あり  
お岩が平生うてらう人倫として親を思ふてらうてらうてらう  
てらう

多う及哺の孝として親を養ひ返すてらうてらうてらう親を  
養ひずんば者うてらうてらうの中も親を大切うてらうてらう  
前を丁寧うてらう金銀の時も多うてらうてらう親をみの  
てらうてらう及哺の孝を忘れずてらうてらうてらうてらう  
鳥お岩といふ名をてらう

根津の土産

芋田楽

湯豆腐

○道源かき

本所入の所種つき堂の跡は道源小僧五席と云ふ者も世者えは道具  
を源七と云ふ者も左ふ道源小僧と云ふいせんきり案を俗に云通り者  
りて本所多うてらうてらう者もあへ入の所を安住女みせも人毎に  
場所を三田堂入の所種つき堂として其道源のやうに場所の如く  
とも懸念もあへてらう今も特別に回数も裏表新道うけて甲十  
女の数千二百人余入の所は多うてらう甲別や回数もいふに  
てらう

初五夜金銀分つて之を京の度後持のあひしと異つて其を衣裳道具  
女此甚量は甲別命の金銀四と並ぶるあり元日大晦日近隣自とてある  
あり此町月の口利とて道源吉五郎或る喧嘩の負未有とて道源  
在りて地を明らるるありとも是を教へ事限りあり公事事とて時  
は之を町月の首代とありて公庭ふらぐくまる男このあがひに救見智の  
女市入より燈可火をこぼし入すくと女市口残去人前よりも自屋  
に吉五郎よりありせり千三百余人より口文つを取らる事毎夜あり  
莫き吉田所よりつぎ堂入の所長倉所新道源為夜葎の好と物の  
堀と云ふ船通んぢうとてまゝあり是をわけて千三百余人を事  
ありされの吉五郎大金持となりて其を去り頂を悪逆あつたれ  
公事とては水川とて獄つにおかされりてその女房おとと云女の  
床の鬼の女房の鬼とんぢうとてま吉五郎が首を取来て葬命と  
夜中家の唯を人殺り葬りて狂人形と有りといふことり

娘の妻兼道が首を取奪ひ取妻のおつた金の五つをく獄門の首を  
法川と幸ひと千石形かむをさせし高き入金のよりりのさぬも  
能ぬよりねかすといふ川にけり夜中ふ獄門のあよりいりしとて  
首を番人の名を食く法金子をせしとていひ取風呂袋の包唯を人本  
不きで之帰らむのち男も増て大夫妻女ぞうと相を後右の首を  
取ひ所本佛寺と云ふ荒井と云ふ顔ひして金子を多しむる道源が  
吊の尻僧を夥衆集め大名法彦の由葬送のまゝ樂巻をちりて樂吊  
おせし事よりといふこととて禮と人々是をいひあへてね此おりの女の  
みして道源吉五郎が首を懸て町月のふせだ役となりて今中ち本所  
りてその名をいへ後者平吉信が道源おとと云ふ所の者も了屈伏とて  
年三十日五りて甚量も相違制りより所へ通ひ佐野川巨他く心を通守  
と云ふ事と

○素名屋嵐孝の女房惜め名言



自ありと笑ひし此事画工英二蝶々筆よも方のまを磨の顔を傾城  
少書ゆて世よまてまやう園扇たもこ入相うくまぞふく女帝  
女を磨を磨を用ひらる半妙まを磨傾城の画に續よ

そもさんうらあさん

九年母のをより出くまあまこう

柏菟

又

九年何苦界十年花乃春

全

○不角千翁妻妙閑

不角と古今獨歩の宗匠  
法橋より法眼小岸進

不角千翁とそいれ継階のをま人の彼

梅宗庭よても堂上の人よ

幾句をまをまて

頼政の拾ひ花りの推もこり

とやゆひしと花編の書ふ出たり此千翁が女房の面を世に傳ゆし  
風雅の道と園女秋色も秋よりあまをれ頼政と白く

たれは近きもの雅人まりふををまきひを思ふおんと有し時不角も同  
しく同道しゆんとする時獨り世を傳ゆしとておんとまやちま  
いせらあぬをて千翁世をまきひを思ふおんと有し時不角も同  
何れも風雅の面をまきひを思ふおんと有し時不角も同  
事まきひを思ふおんと有し時不角も同  
初角の向もあり陶剛明の筆水の旁を助をまきひを思ふおんと有し時不角も同  
思ひ伝ふるおのまきひを思ふおんと有し時不角も同  
仁を感どたり別そまをまきひを思ふおんと有し時不角も同  
我子あり佐のまを連し頼政のま  
まを我が傳りたりとて因りしけりまを今女房にまを傳りし  
いふあり不角の妻は不角おまのまを死しとてまを不角  
五月雨や何ゆきまをまを家の色  
右いおの女房死し時向あり此妙案を今まをまを



をよめる馬をほつてもおえ安をいへとよと自由ハ其の終をこゆる事自  
然ラ一ぎの妙をよめる事と云ふこと今ハおろつてさうさつておの事々つてい  
者ハか

○新場九糸之信

新場の者店ハ九糸之信と云通り者も高貴ハ者屋も今中野名  
そつち者之女房も古家入馬屋の右近といはれ女あり夫を信じて十二位年  
吸新より女房お返しと云ふより連東より信を四月十二日成しを市川海老蔵  
九糸之信を新しと

夜繼やとふ薬師の引合を

祐蓮

と云ふことハ此九糸之信ハ吸新より通ひし時中の町お遊ひをよ  
そあは腰をよめて女席更りハ十八中酒吞抱ひ居たりさつ時入りの  
よりいそがしそふ生鶴と云ふ此商人ハ新場の八と云ふ其れ  
の燈き者といふことよは人をよめて随かんと昔し脚あり九糸之信を

業屋より見てはよと云ふ事と編賣之屋は是ら九糸之信をといひ  
らんハ一ツ言ておとそをよするいり賣之ををたてし石をいひ  
かんといふ業屋亭も女席も此所を見てもあざりてまわ腰をうけまよ  
とあがり強といふ九糸之信といふ極例の角ハ腰をよする事と  
と云ふらん極例ハ腰をよめて居たりと云ふ九糸之信亭も吸新の  
くれよといふ九糸之信亭といひ賣のふといふ山判一五入て夫を亭  
より花よりと耳ハ信をよらんと云ふ事と云ふらんハ編賣持する信を亭  
らと云ふ事と云ふ事と云ふ信をいり賣ハ房す時といひ賣亭も  
きり是つことといひ賣件ハ山判をよめる信屋のとい置たり亭よりあ  
ら合ん身をもよす事と云ふ信をい押しつた事と云ふ事と云ふ  
夫よりいり賣ハ信を信へて二丁目のとらと云ふ事と云ふ事  
はるを編して九糸之信の亭よりいおくが町の者ハ皆あは通のいさ  
者といふまに自慢しちよと云ふ信が味方ハ信を能きといふ事

人の世とすま事と諸事一善事小付しうる心底の者ありとわらま四  
く是を用ひて親をすま事とすま事と是ふる事と者をもふ記す

田町砂利場

志中うぶし 金右衛門

三田同朋町

上見ぬ惣 長左衛門

さう砂町

遠列屋 小口市

神田鍋町

大工 人形芝居屋元 次希志郎

本所亀戸

猿次郎 小梅屋元 甚左衛門

○ 本石町鐘撞の娘轆轤首

世ふ不祥の名をあら事古今その一ははきくも粟の喰を  
穀の類を喰ひぬ娘とて書り今本所前の娘生甚だ愛され初め  
の時より世よりして云々も此娘ハ強く首と推しつたあやゆ  
より十二の順も子も連立してなる通ひは是のこ子極さきふ

色白くしてぬき衣紋の意ありあふさく首飾長きやふ見しり  
金吹所も留指南馬場糸師より通ひく名をわつとさる娘入順  
の成て人のいふ九種撞といふ者ありて罪のふさ者として自然と人の  
恨を強きあり仍く其女轆轤首といふ名も金貨一握のことも  
貴人と云ふありと江戸中より取妙法すまといふもそ鐘ありは是  
は其事は双入を尊をあらふ二人床の初枕とて夜更人静まりしか  
つよが海原のうらさくく響を目をさる見とまて灯火をうたふと  
さるあつて首自然とぬけ出た大戻風のこも首よりさる  
さるして世貴人と云ふもあく成か時流るて去年戌巳月白福前  
の笑庵と云医師活氣者あり強く返首りても苦うす貴人  
とて婦妻とす随分かつよ女業うけし事あく主婦中むす  
當二月一子をりつけし轆轤首も時流るて平人をすまのり旭  
医師丈庵と云先の宣とてなる今も目も流るし世の枝葉葉を



居たりしを

○竹の子傳女

是と江戸御府門のりよめ及大赤童も能く不三津として維新  
らぬ者もあれた高物町の竹の子とて思儀よ名をもと者あり  
その初とあらず申年のは中村十助 勘三郎是居は切場及之  
熱とまもる者之 方よて食焼の  
まうあやのの奥とありて十助方よて例に年よ金をあ或分福の  
給金をあく居たり或時びむ浪年の御堂の寺ありするを杖を  
突物りゆきおる向より大キある町人の葬禮と見て麻を下る  
町人大勢の家ありゆけりその数板板のつくけく白土塩といふ  
うりえん風吹来て中村十助をうりてまのうりえんを居右の  
白土塩を奪あく右板の先よとり施すの面へ向ひぬの介あてり  
くま僧俗ともよ途甲よて色々完れども棺をさめて其の介こ  
ありとりうごさぬわゆる身施すとも浪者の何集あまバ御

内證して年をたはく金子拾ふあ入れば是を得かしてを通り  
少くして得といへとも右の白土塩は返りて持て歸りたるあり  
流り中村方よを吸を再も須新和泉町小比丘尼の宿ありて  
てたる時分より金子みあけりけて比丘尼宿をいつけり  
を道徳をあらうてかく金子を施す一も或時秋本所より別居の  
客をよこしてあり いりてあり 比丘尼おぎんと云ふ枕を並て床て  
居たり一も疾苦の中よて顔死一も此客の懐中よ小判二十あるを  
をよく押強くして秋秋とせりおを客を秋本所よ有徳の者候  
くもが親類をゆゆを思ひて内證あく一も死るるを候くが仕人  
くそ胎りたりまより此人金子居居子舞巻馬枵をか抱境前  
勘三郎産く備一金あると初よ斗よ十助世話をしてゆ一もく候  
金が金を生く候を夥数事ともあり善所古き居の賣居候  
を何事といふ事あく買廻く自代を居て古の圖をよせてくる事

少しゆけり事神童ともいひつゝ(八) 戸の皆中の子母が見世  
 こうや此者を中の子と異名せし事ハ抱の歌馬ハ八代と云ふ事  
 をせつらんそ終ふ事殺るる事子の親元ハ中の子を喰せりま  
 あてらまて金傷して死しと表向内院ともいふ事あく海せり  
 世とぞつてえんが異名を中の子と云ふ事跡の外富貴と事芝居大  
 金を物して中村慶子抱る子ふりて威を振ひつゝこの事年六月病死  
 して増上寺内了源院ニ葬り急成院頼所信女と号して中の子  
 子娘おきと事赤町小餅の高岡ひをりてお續今芝居の金えをりて扇の  
 氣の女ある當心月十留境所焼失してんばいまも夜のゆぬ月お勤事  
 座普請場の幟を掲ぬ事よせお十中立て普請ハ十五首並より初  
 ろと程く二代の中の子を親中此子も及ぬと事半夏湯女と云ふ事を  
 唱あつと

○名画池の九霞

當時江戸のふ限りすことの傳はる繪師の名人といふ池の秋平画名を  
 九霞と号する者之元京都の如生之丹波を程長ハ英一蝶うりて此九霞画ハ  
 妙を以て今五本の指を以て云づくより戊辰十月江戸へ来り諸侯大吏  
 此無と云ふ及ひ強ひて大名の此座後ハ長出あつたあつて席画はハ  
 未二十四五本の者之あるはハ吹バ京都の綿をのり子依の爲ハ富貴  
 少ハ一切推し下りてや云々衆と事せり者の由まゝ大坂ももて武を衆  
 と云義を吏節の好りてこと富貴を搦り終ふ義を吏の事と事て  
 綿武と人ハ呼ま今も綿を吏とて名題の者之此りて云々後ハ名人と  
 事りてことや

大雅堂信名  
綿店

○藤植胡弓名人

當時江戸板町五丁目恒宅胡弓の名人之並くのこと遠くは江船の事を  
 云て是を引あしす事音色括列りて能梁の塵も死と奥電禽  
 歎の心をいめすこと云々後ハ此友植ハ堀田相列海の介氣入不入

膝元へ候す候々人々を極ふけり堀田も取入妙計を以てし

○山彦鳥羽が三経

山彦源四郎といふ節三経の元祖を名人のいへ山彦といふ三味線の名は源四郎の十寸見を名乗る渠が家山彦と名付し三味線を名乗ると号松平出羽も度渠が御を悪く称し終つ事しと云ふ葉を以てうれが家の面目とす又多羽や三右衛門も唄三味線曲弾の名に有馬を蕃改度より東氏線とすといふ名を貴ひ今其通るふ名は是ま渠が家の名意なり

○扁師

新和泉町平田節といふ本履の名人といふ標本遠足結あらん限りのぬけさといふ事なり一平といひ一をすぬりぬてを履くら旅といふ此平田節いけちうといふあり此節の平田節もむげはうといふあり九りり坂を足結といふ事甚経流節の渠が本履をさか

うくしりり坂の難もぬく浦の扁師のりり坂を自由節といふと云ぬまの流をとりしり

○津林釜瀬戸助藤四郎焼

津林釜の極のわら當北八丁堀小島を名を大西國定といふ者之藤四郎焼の浅草五重天可うる魚者といふと云者ちやらん水うを焼之瀬戸助焼の教をるる瀬戸助焼なり

○快全團其碁

當時團其碁の名人を遠國故藩を誠く愛ふ程のりりはゆ申の團より源五郎といふ者あり此男の五十年以来の名人之年毎に江戸へ出て旅人の如く不之彼源五郎が息男として前髪立の三松といふ小將を五年以来より連する是又其碁のせんまといふ一器用石無流のといふゆゑはあふ江戸常陸の團其碁の名人と云い信上寺塔中不化快全碁碁是今の世乃其碁の妙を得る人といふ今年若うれば此の後年八月廿日此世

傳のこを叙も其のまゝくわくすと云ふ不忠義の上の山まゝのどろ

○中將棗

今江戸中として中將棗の上りて其名をうへに旗本元并福祿の町人  
皆其門下とありて會合する其先生は西丸山書院番大伴又九連の及と云  
人あり濱所は短毛あり六十斗の老人と其生れ付少魯鈍なりされたる名  
人昭判

○七國將棗

晋の七國將棗として近年朝鮮國より  
將軍家へ就くより晋の七雄將取合約絶りて其盤大廿二回を以て  
約絶多し是をさすふ七人のてさすは將棗腰を熟て杖のやう折る布を  
以てさす事七國將棗と名付せり

大納言極経の介是を御好持され又田安右衛門督極定初三是を學ひ  
給ひ田安もて山書院番元田内左衛門及妹おろし及と申女中と云ふ

あゝ此人の續一者も下人も此一され

西丸 家治も田安も 御遺右のおろし及を山借りのせは此  
女中も七國將棗御好持されと云は性よりしてと云ふ事妙也

○三條宗三哲名醫の名を得

日本橋篠宗三哲と小町の名医と近年雜長持ふ其人と好く余初  
うら書行はせり入山形小坂名の夕の字ハ下りの夕の字うと書て約好  
まて常帯千人の財を運ひるを幸あまそよの金と云うと云ふ  
約はゆきより先中醫師は似ぬ大納言持して子孫を傳ふ  
昼りりし腰を寒き果暑氣の差別もなす是を大ひき者制者  
も此腰熱し居しといふ人の病人を制す一ま。穢湯を入煎版  
を昼耐ふし喰ひて後番附の合て吸入脈を何れを見らやう斗  
うし此版雜長持に記せりね三哲といふ本病人も紅花散の  
方のも好く此かをりし事あり今く加減も好く紅花散をりし

小余人の紅花散より何れも遠く電の富貴と好む一財多き事ありや  
ヤレきぬこの奇術ト云ふ事人こそつゝ今小半を重くする事  
既く惣目付付くやうに御事を思ひつゝやうに紅花散小加減を改  
れども此頃の事一

○平澤九因

平澤左月と云ふ者あるを以て和泉後橋向朝通より子  
うねるやうに志くせぬとてわけてその節を見えし其日細き煙を  
つゝこの事保元文の頃より子年より出で今左の一流平澤流と云ふ  
獲りつたゆきぬぬえぬと文盲千方の匠丈の居替宿習をすす事  
一月の或二夜つかり白浪所をも居つてまきす亀井戸をもまきす  
此頃にも國橋未保所是も引越して居てもやうにすす事  
宅疑ひ形一書を以て知る一一人と好む宣つらる事のみぢん  
何れも知るを却る人を一人も思ひぬ人々を憎むて或時一人

これ軍も来て言言すに悪くお願あり隣へお少悪く居  
まれずして迎ひりるに戸中小屋も會所を指置一六を小控所  
亦自奉ふと七二七を頼所の不動院三八を渡り山本之内隣り  
今の家を借るをい中と稱して何れも知るぬ鉄火を見えし中  
中節をあつた事ありぬと取教一素人時とあつて金浪をむ  
ほり媒と一表此障子這又いよ知る人の介お好む後述と云ふ  
不意に中をぬれぬと對面不致のこい除を弱き迎言葉を書き着  
知る人こそ雅台せん事を思ふその事之軍書續作神田杏林と云  
者白浪所推泰と論議して又左月を云はる後と右のを  
張れをわけて人ごりりるに或時其歴くはく招き左月  
此方の流りし此箱の中へ入るものごとく入るは  
右のやうな箱は月有とも正史生類への役も立物と云  
國とのつわくありふしぬりの形も子細りし其は方



悪俗之あり今終る落いそ散ちる者一たの願ハハツテ種もつりて  
陀羅尼品の願破作七か如何利樹枝の經文的中きまてと見や  
ま中して日蓮を惡いそ論義といつた經文釋書ハもちんも鏡をむ  
かひまて一也地の秀句早竟衣をまて一も巨匠と謂て一世の今もふ  
たづつうさつといふ事惡縁本事をまてこれバ雲海日蓮をまて  
言毎二日蓮をせんたりの家より出つり自死の麻皮をまて衣とす  
と身之抄の書ハ日蓮自筆とて書まてり地も日蓮ハ禪多のまてせん  
つて禪多の事をりぬり也一麻の皮をまて衣とすとい書とい  
禪多ハ極多のまてぬり力ぬり廣宣流布と長房を提て長馬の  
繁顯自曼陀羅とい何事日蓮とせんたりの子也まてんたつて書い  
勢地をぬりてまて一此雲海ハ尾張の名護屋生まて毛ぬき瘦のつとい  
切まりのと毎度右と通惡い一紙幣一經のぬりあつて其人今終  
入阿鼻獄といつて一此為耐もまて一酒徒とい日蓮宗中村壇不の疾

堪とい不化を返言續義とて墨海の續義の近不の日蓮宗の寺ハ  
也て續法一と釋經の中文天々の三丈妙樂の巨釋も文のまて  
まて返破をまて依てらんこれ流るやて疾地ハ給つ墨海の惡  
俗日蓮の弊をぬらんといふ力世給も奴名護屋の切りのあつて日蓮  
ハ弊を五百年来ぬりまぬりまて方の祖師法也と友井元と俗名  
を附還俗一配原の身とあまの標ハ祖師法也と元ハ額をたて  
庖丁のやふぬり力てやまて同惡りハ給て一疾義一と也友墨海  
をまて一友墨海坊ハ疾地と稱し備とせとてまて友ハ疾地  
恨も増上寺とて呪呪願伏の法をいひ危俗を集て疾地をりまて  
あまて一也一也のまて一も疾地を礼のて續法成つてと日蓮宗  
万心の不化法花經を以て祈禱して疾地かかると今を倫根村安徳寺  
の住持とある墨海も三縁の一文ありまて一也のまて一も右止るとい  
天台の秀天とい疾地をまて一も身持も身持といてあまてと續義の

やうなありき事多し世多し此人の氣を以て事なり依て秀天  
を斬り寺の大に勅化は徳符なる由ふは十八夜何の回向修徳の事  
一七〇年中多浪何福と此後を極りて産ひ發義脱ける事此秀天  
町坊よりして町所中の心荒井町と云ふ大や次多由と云ふ豆腐屋の店  
を借宅し居之則女房を以て妻の名をお由と云ふ女子を人おとの事  
十一歳男子招致す九女殊に顔人坊を流系坊とて此類多しされ  
學問を微塵もあし若世書を見ては惜し思ひて馬文耕を尋ふ事  
ふし能教化しそらん彼坊修り中の事平生流末の地は秀  
向の事又と軍書のもし能谷の先陣官言ふとさりといふ便あり  
急量之彼りのかむ日蓮を妙法蓮花經を弘むの妙の女おのり  
字義女おのりおもんげきゆといふかゆの事おのり彼坊多由の  
権多由とい何の事あるとや子持のうらむを何福乳がぬとて  
難司ヶ谷の鬼子母神の米を借りて粥を以て事なりと云ふ事

の心荒井といふ大鼓をたひして題目をやり何をもし地獄の麻島踊と  
地獄の悪鬼を焼く事おのりいんぞ心不仁不義あるんされん世  
秀天の日蓮宗坊下の要傳寺と云西檀一の所化西道の流法  
よりおのりして秀天がとも先づ此要傳寺向て破する事おのり  
今もいん中の氣を以ておのりの事いんが傳を以て事なり

○今弘法新高野心の事

三四年来何なる風来せしや今弘法と名乗る不届成賣傳の  
事なり京都知積院より出づることいふもを能授けし然るも  
心師の言をす不いお持お持不思議とて傳く昔の弘法大師  
迂化ししこと今弘法といふこといふ府内にて男女群集させ  
金銀を貪りし事なり一りきそん不義に付思ひ愚心のりの  
幾多し人といふ事を知りし此事終ふ  
公庭の中へ先御府内を以て遊放あり今おのりの住居は多由言弘法書付





けり愚成る者享保の中頃より浪車をこち園橋のつらさを毎日催  
して不登さも見苦敷敷うらち或は砂ふまびを溝堀へ入て泥よか  
うらちを引まこひ通る馬の尻尾を蹴ひて大さふまねくまておきりさび  
杯する事甚おう——小児婦人を見て陰差を出て一哭させたまひ——  
神の苦もさつきあぬ——されとも礼をといふらあらず此者の事を誰  
いとも知らぬ藏所のおさけと唱り此愚鈍の者親の相恋より  
能き身との人の浪車新堀り居酒蕎麦らんごんを商ひ和泉屋の  
菓とうや一子より愚成る者持もる事此いそれを辱めふ此和  
泉屋の女房が妹を人者さか彼いそらやとさうり居るらうを亭  
主人志きすそ妹と安の通——終ふ彼妹腰胎——より其女房我う妹  
うらちといふも亭らと客通の腹を疾疾せむを居ふ大よいうと妹を  
色く赤擲——と後客のよ子おぼ——菓を吞せりれいそ菓毒あたり  
妹の死を腹のよら七月に及とうやねく信成る事のとまうりといふ

小女房も幸事お泉屋の嫁すといふも腰胎の事も知らず——  
妹死せし月より方このりてねくそ月湯て出生せし女房のよと  
おぼりて養育すといふもおぼりて二方の事とも父母の顔を  
見知りしゆりて父ともいふ事いふあか——信成る事とらうと  
もう——と思ひてうらちとらん思ふよりお親をく神ふ祈佛よして行  
あ——とふこは菓のひまても東西をを死ふ五方の春初る物を  
おせし女母親を見ておぼらと信成る事とらうとらう——と云あひ  
年月宣りても母親の事をかたけ——と云より卯の事いはず交  
まおわて世とらて花所のおぼらとらあうらう——と云此事知泉屋  
主婦ハたさうあ——みるまふらんかを因果曆然の理ゆて腰胎の  
妹を信あくも殺せし女の報いあてそ腹の子又また女房の腹よ  
出生せしと見くうり妹の子あけの習之母といふす——と云あひは事  
おぼら——と云事とらう——と云よは事とらうてそ因果を志あひ——と云

とまよりいつもやま婦の源く仲道よ入て藤衣の娘とありたる  
しそ阿どきあき事ども明を是花前のおどらひ志るといども  
そ子細を知る人少くあし依る書記す

○大口八兵衛

浅草御花前よれ差米倉大口八兵衛といひ馬麻者とて奈有と強  
く商賣の大事を志して新吉原の傾城境所の野郎拜巻と  
身代をゆへ福こが微を志し酒宴振舞の上番日新事来りても是を  
忘却し書留御花前をもち今日をいつと知らぬ日のころしを  
人の指をささるるをもちつと見えぬとあきまらるる新吉原大の  
さや総角といふ傾城を我物として金銀を貯ちりし者を極の極の  
くろが今年秋拜巻相中村中とて市川三井が総角助とてさ  
よもて人々此れ又又総角助といふふを相をわけまことさし女希  
助とてさし入るまはると仕理してむしりし相違家の相之扱を年

浅草御花前よりも助の相之扱をよき積物と致し新吉原女希より  
三井より一蛇の目うらうらふ五葉牡丹とてさすとの扱有るを心のめく  
平送りの花前の者共を若菜のちりりんの頼らむり御巻を相違と  
云敷も張るは三井より送りりるるをわらひ毎の相之扱をよき見  
物とてささるるもさし後事大口八兵衛といひ別々の相之扱を  
ゆへてぬ又此八兵衛を今又花前より三井より積物とすは積  
総角といひ女希の者共を総角ふるまはるる所の助といひは明  
物とてさし相之扱を仇づりて新吉原を金也とて扱治する意休といひ  
後を浮村飛音助の積物と意休と見取申せんを浮村宗千希より山袖  
微を對ふ扱きし地はあは旭の八の字を白糸とて懸ふせ仕置の  
りも此相之扱の浮村宗千希大口八兵衛のまねいしりし此相之扱の  
より一人の知りし一取之今もさしと総角の総角より相之扱を  
寄らるる

○河七庭華

芝口と橋本桐尾の朝... 富貴なる薬種... 河内志士... 能世... 其月... 二の... 身... 急... 少... 花... 大... 在... せ...

るよ... 附金... 中... 物... 此... 所... 行... 人の...

○山聖人左助

新大坂町... 人... 市... 帝... 早... として...

妹平花の婦の風を——は合して瀬川九亀の噂を京極屋のきつゝ乳を  
 入りて其の兄弟として居居て招きをきく川出物を給りて後平花の役者  
 を止て浪人と物をも京極屋より合方扶持をとりて村平花と改唯今  
 瀬川の借宅して結構の事なれりて住居す之相又庄助も右妻の氣を  
 俄小富其の身と物と今も電に居る事なれりて悲しく家産をやりし  
 きのふと樂局をして奴僕取寄りて今も大福長者と申して羽左衛門の事なれり  
 難儀の故に金を貸付金元を志すはしと其の役者も今もよりいふ事  
 なく其の事して皆く庄助が門前を流くといふ事なれりて水汲り  
 たりしれきる者よりいふ事なれりて裏家の少の而を借人より住居す  
 る所より庄助母親を人より姉妹おれを喰ふやうに親も親子に人の  
 中ふ有やあやと何ふたといふ事も難儀ありて母親は比丘尼あて  
 毎日人のと何をもとて一錢を乞ひ一神の米をゆてゆりて金事なりて  
 脚をてきりて彼神と同宿して居ると其の役者の者なれりて事なれり

費知庄助と仇名——くさぐさ此立身——くさくさは新費知の事なり  
 形も走りたりとて其の事なれりといふ事なりと其の事なりと其の事なり  
 何れも今も大福長者と申して庄助より違ふ事なりと大信者めて彼西祖師の  
 宗帳よりて力を給ふ時いふ事なりと其の事なりと其の事なり  
 事なれり——近年深川津の寺よりて身延の宗帳の事なりと其の事なり  
 庄助と張せりて此の事なりといふ事なりと其の事なり

○あき丸仁右衛門

本所吉田所は小性細川番元兼松又曰京屋より川旗本元の地を借り  
 て其の屋敷を借りて住居りて大勢の家来は子より多しと其の事  
 ち地をいふ事なり及音京屋の事なりと其の事なりといふ事なり  
 ことその仁右衛門といふ事なりといふ事なりといふ事なり  
 事なれり川旗本元元の中る事なりといふ事なりといふ事なり  
 骨折をいふ事なりといふ事なりといふ事なりといふ事なり



をくぐりしとてしりて流るる上杉城後の彌信と雅隆の韓  
信と一ツもあつて文才の是を中て腹をくぐるぬ

○風鈴五郎七

堺所勘三郎本戸頼の風鈴五郎七と云者を能き男振え葉芝居にて  
大きき者之去来も春中勘三郎芝居本戸頼のそのを人未報されし  
時も半合せし一う皆芝居の為此五郎七身命をわすれし程をまらぬ  
その形をよぶも白く大きき額大よぬきけ顔よくし丸顔して  
能男形り髪をふか多しひしと髪曲を申すしして五流本葉芝居  
路の丸此紋を附諸人の秀く見ゆし此の親方半鐘控せとて  
名もさしとの之控七の親方半鐘控五郎七のつりさのさしつれば  
半鐘控七半鐘控七の子あまは風鈴五郎七と名をいふ本戸頼にせし  
を今一日のきりけれは這入はめてさしつりし時といふ心を以て風鈴  
と名も可なりはむる

○夜發一と規

夜發を夜發とてしりて稱するは街賣女色と法花經の  
並門の記に流るるを想縁の親方半鐘控七の親方半鐘控七のつりさの  
前此三つありてを賣此流九人別曰くふらふとてその道は也  
語る其申ふかありしは夜發の中一際痛く思量し終  
くお志のんとて女を毎夜柳系とてしりて筋遠橋の縁に發結底  
の裏にゆく人此女を知りてさしつればおしりしは去来年の暮大  
晦日の夜に客の數をうご三百六十余人とてさしつれば三百六十  
日一年の日數之又大りの數を一と勢のおしりしはさしつれば  
その親方一とせのお志のんと名をいふせしりしは今もさしつれば女に

○お陸

浪草親音地内さしつればさしつれば浪草お陸とて名顯め女とされ  
は京都祇園のさしつれば女の権といふは名をいふはさしつれば

一生の讀款教をつてせり梶の葉と云て彼女も讀く教の集る一年  
仙洞の御々糸御しとみとして讀くを尋てし具款ふ

おほいけき雲のよあふあそんさ  
雨ざつとてぬきくそぢくう耶

とうと此やあやの女さく款を誦す今時のあや女といふ異之  
此よりやおれくむすい髪之結ひ髪之と此より款をつてし中  
女の結ふ事とけりまより今讀あよのくさ事之

○ちまづらお松

ま三田町長九郎の所居よまづらのおやうと云名類の安女希ま  
将き人のぼんあふれ芥をすて巻といふ心してまきいあのみ名  
を附より掃漏の流るちいれた款をまとい事よともあ  
さう三田の河波徳島の家申ふ三浦常次希と云名類式百右  
斗願して願くまより此松の別居大金をわして袖あふとまき

あふ新吉原の新造おせり同家よま今も意欲の心を築きて全盛  
少年あ此三浦の甚風雅の人よと那端のよるけり掃漏のおま  
いと兼好信原のつまき草ふおを流しき掃も外掃の座とい  
やうま事もあるちまづらのお松と唱へんといまは其あらん  
昔うらぬりのちり塚のちり文車のぬきとらまはあまたといゆき  
女希ありともあんど意欲ふ隔てあらんや只今のまきいけ敷  
危病よともおの位は増え下これ掃漏女希の中といふま敷  
とまきいおの位の松をとりて名をいひまは掃漏まきまきの  
おま事を知らず思ふの細くけり穴を通しみんとて馬文耕かをそ  
せしあを見ん人おうと思ふくむさし三田町まきいけ地  
の楓をゆの五十ぞうと下さげてゆひまきいけ五十ぞうとも  
かま葉の法園流文名のお姫さんよりまきいけをこももて  
下切のみまは貞節若婦松の五文字を能たりといふまきいけ



すすゞあぎのきのきしあまのみのをを合て若といふとや皆若  
傾城も偽りも辨る所あづち金銀のまじりを論せんや

○ 踊子忌りんおとるお縁

元文の頃を江戸仲おどり子と云女とて立花所難所村松所を才  
て所く母と素人の娘を三味もん上福理を教へ也應々の慰うてあま  
ま富ち若貴合の業や扱き一應者のやめして母と縁して附係  
出入りたるを月元文のちの三五七組の忌りん子花組のおとる大船組  
のおとるんとて極名類の芸量者とうんい髪友うらを才一と  
結構ゆる極うらういを用ひ多くい銀のめんさ一扱して花を相え  
の踊子暑氣の露の夏笠うらうてい髪を損さすとして三人對日傘  
をま紙とて張らせ用ひうらむ立流のうらを柄を思ぬらうらうて風流  
紋を附たり是ら座をの大王傘蓋として喜ぶ流ののうて傘を張  
らせうらうけうらうと云通俗漢書の中の節を吹のうらうと云は始

うらう是世と二統の男の子とてま紙のうらをさすうらうと云うらうは  
医師あどい是を止す一とせ馬場瓊波も 釣命を蒙りてま紙  
見傘を 公儀よりい結衣も衣 結衣も是を志部一と云うらう  
今うらうをさす人多うらうあり女も若うらうと云うらう

○ 車波女

ト谷三寄町車波女と云者も此うらうの金の子を借して人を  
せづりゆすり同前の事うらう世の中を渡さうらうと云うらうてえい  
独りうらうの家より出たりまハト谷和泉度橋通りのい統士とて三枝  
徳島度廻りうらう七十俵又人持持取の巾着は悪のうらうと云うらう人ありき  
巾着病死の後伴郡沼部家留せしうらう身持あり流の後うらう  
公儀よりい帳を下浪人せしと云うらう浪人せしうらう是介養育金家代  
金五百五拾兩をうらうと云うらうと云うらうを借り主婦母渡せうらうが  
いのの浪うらう根津の女島や又うらうと云うらうと云うらう又い居廣山路

見せぬ相違の金きき或は借りて利をとりきき或は付一月借或は  
この利息を借りて其の彼利を先く引取り入替金に引かすか合  
拾五文引きあひの如く三かき取三十日切若延引付ると澄文を書留延金  
利息をえり終りて大合のききとて澄文の飯向に三枚ききこのつきさ  
せぬ思ひ澄文の家筋させ家賊をあらとむとて事いふる知らす此の  
澄文をいへばとて借附の利を毎日催促ふあつて風雨のた  
別あり此のききまの布子よ上田の絹の帯あつてまの糸のたきを  
腰ふきし根津のうらより浅草並木三橋門前紅横町堀田原門前馬  
道田町のききよりづらとて借り金二枚ききといふ本鬼のや  
成る者も勤せぬ悪意知者之此の如くも思ふこととすこと云家初  
此の澄文をきき入りてまのききとて同氣を来すとすむ同町の又借紙  
たきまのきき或は此のきき谷中の感應寺にききまのききと其の金を以て此  
の澄文をききとて合せ同様のききとて借りて近年二人連立て同づら

貯るごとくもきき取らききりて途川流がききりてききりていづひりや  
此者車錢を借ると云事つ但お人両輪の車のどと云事つと云事つと  
風雨の日も能くききりて事つと云事つと云事つと云事つと云事つと  
いふこと中一なりと云事つと云事つと云事つと云事つと云事つと  
をねりて其のききりて廣くうらあつて境所を樂や新道茅町新道本  
控所天神以神神明の影馬ききりて金を借す借不あるとてい  
一の利息或はありて明日とていふききを控す此のききりてのききり  
まのききりて此のききりて金のききりて大の借負事する者の借りて  
まの借りて者幾人もききりて思ひの事と此の金を馬金といひ一の日は返  
ききりて一夜延引すきを仰り馬とてまのききりて百文利息をあら事と  
馬といひ細き境所ふきりてのききりて馬とてききりての者いふ仇名を能  
い事 貯り さん  
公儀は従古丸の事をききりて隠し言ふる馬といひ思ひりりんの羽織

を差して大智横雲のたぶ川頂の青徳をさうめ町を通るを見て鈴  
馬と云ふなり来る所とて以事之此をうが金子ハ元竹内少佐士とて  
迎賜を今と仰ふ借一人も多くあまとも馬金と云ふ二年以来  
郡次希を滋紙を連立ありき車とて云て呼ぶが此頃を人  
成るまは片輪車と今なむをを此頃茅町並危の女房どもは彼  
むが事をま田とて呼ぶをいふと申のには片輪車の柳家の紋之  
誠後のま田の地とて呼ぶ給ふ四人なりとて

○高島薩摩琉球時女

柳井の所は元伊多と云ふ人きも入之を女房に取揚とて  
知りて所をまゆりうがみ斗して仕合の松浦肥前も度後居の妻  
のまを取揚げて一枚授け此身の時も時をまをまを中へ見若  
植生の山危のいぶせとてまをまの世結やまといどもまを  
あ事も知り見せとて草花を賣又を鈴夕草亦をうりて賣あ

る見せぬのち方清二に中並とて高い一もまを近所とて此をを  
時とていふ隨を其日をやり一ます者の女房産する時とてまを  
此まをを頼む時とて然るふ松浦肥前も度後居のまを  
高産うまむ時とてまの横の所薩摩を病氣とてまを  
写り合ふ時とてまの近所のお徳のまをまを命に役人をも  
此まをを招きしるは俄に役衣裳して取揚し一枚の内はまを  
身とありぬされいをを根の枝條のまを彼處へあがら一まを  
まをを招きしるを終りしるはまをの頃とて市川相越  
まのり合ふり隠居此まをが事を中へ知ひ終りぬ相越とてまの  
名は何と申ふとてまの高島とて申ふとてまのまを名なりと  
は清まの急代は高島とて申ふとてまのまをまを申すは保  
年申は大坂へ薩摩のまのまをの頃申れとてまのまを  
深井花屋住とて申ふとてまのまをまをの頃申れとてまのまを

たしむもろくくは栞是此後

運と云ふは婦人雨ふれ顔見せん

と隠す女の子を後一うへ此物とて此をくまより既出世して  
大名方の山鶴や一出入して是程高しうへ中のみ紅葉は別當と  
申公妻を男子と云祈禱を申秋葉より山麓を歩一此をく取  
拂ふ子のたれもの因山符を掲げせと秋葉の山符を出せりとの  
腰月より知ると云ぬ一世をきぎうへたると思ふとくして誰  
もく此をくをたむ者あり後く此の介因山符は長命うへと今  
そくや山符ども初夕の湊ぎも大よこあり此頃ハヤ一と町のまら入肝  
を賣して春二月頃と女をく人を十人五人福々連て此をく先く立て  
うへ一と山符をくわくあう一く山符を知ぬりのお一は産麻のく  
みもあらず極疎く山符とくおのまをくうへ云出してく山符極疎く  
とく山符とく一各方鳥の鳥んいよあまらず栞是よ名を所て世にひ

たしむも山符ありとて今でも是を自慢する事とおうし事な  
形も

安政戊午年五月 中瀬流覽一過 活東子

明治二十年歲次丁亥仲夏

筆者

妻木賴德



